

# 保育園女児ミホの他児とのかかわりと保育者援助の実態

丸山良平\*

(平成19年9月27日受付；平成19年10月16日受理)

## 要 旨

本研究の目的は保育園で生活するミホが遊びと生活を通してクラスメートとのかかわる実態と、それらに対する保育者援助の実態を明らかにすることである。

対象者は新潟市の一保育園に就園するミホ、そしてミホとのかかわるクラスメート、クラス担当保育者である。1歳クラス期の2005年10月から3歳クラス期の2007年7月までの1年9ヵ月間にわたり月1、2回の頻度で合計33回の参与観察を行い資料を収集した。この資料から作成した事例を分析し、ミホは1歳クラス期では他児から玩具などの物を奪う攻撃的なかかわりが多かったが、2歳クラス期には攻撃的なかかわりが少なくなっていたことを示した。1、2歳クラス期のミホの遊びの様子や他児とのかかわりの内容の変化を分析して、その理由と保育者の援助を考察した。

## KEY WORDS

Care and Education	保育援助	Interaction	相互交渉
Peer Relationship	仲間関係	Human Relations	人間関係

## 問題と目的

乳幼児期に子どもは同年齢の子どもとのかかわる中で、多くのことを学んでいる。斉藤・木下・朝生(1986)は、この時期の仲間関係が社会的知識、対人的知識、対物知識を習得したり、さらには自分自身について、すなわち自己概念の形成の上でも、豊かな情報源になるという。そして仲間関係がこうした多様な知識の源泉となるのは、仲間関係の多様性によるものとしている。こうした主張によっても乳幼児期において年齢の近い子どもとのかかわり、仲間関係を持つことは、人として成長していくうえで重要な経験と分かる。

今日の日本では乳幼児が同年齢の子どもと初めてのかかわるのは、そのほとんどが保育園、幼稚園など保育の場といえよう。そこは子ども同士、子どもと保育者などの様々なかかわりが織りなす世界であり、その中で子どもは必然的に他児とのかかわり、仲間関係を作る。子どもの他児とのかかわりは、保育者の援助によって、良くなったり悪くなったりする。従って子どもが他児とうまくかかわり、仲間関係を育むことは、保育者の責任ともいえよう。

1・2歳児の子ども同士の相互のかかわりとして、千羽(2000)は二者間の相互作用が多いこと、接近・接触・攻撃などの身体の動きを主とする行動が、呼びかけ・話しかけ・質問・自己主張などの言語を主とする行動よりも多いこと、親和的行動も多く出現しているが子どもによっては攻撃的行動を現すものもあるとしている。また荻野(1986)は、保育園の乳児クラスでは、玩具など物の所有権をめぐるけんかがよく起こり、物の所有の優先権についてのルールらしきものが存在すると述べている。そして2歳頃になると物の所有の成功は、優先権によって決まってくるという。すなわち、自分が欲しい玩具を手に入れるために、初めはけんかをするであろうが、しだいに交渉するようになるであろう。反対に、持っている玩具を取られそうになった幼児の方は、奪われないように反撃したり、逃げたり、保育者の援助を求めたりすることが推測される。

本研究の目的は、特定の女児ミホに焦点を当て、ミホと他児とのかかわりを事例で示し、1歳クラス期から3歳クラス期までの彼らの微妙な心的変化を含め、その実態を明らかにすることである。そして幼児たちのかかわりを支えた保育者援助の実態を示し考察する。

## 方 法

**対象者** 新潟市内の私立保育園に通園する女児ミホ、ミホとのかかわった幼児とクラス担当保育者である。2005年度の0・1歳クラスの幼児は18人で担当保育者は7人である。2006年度の2歳クラスの幼児は24人で担当保育者は5人である。2007年度の3歳クラスの幼児は28人で担当保育者は3人である。

\*幼児教育講座

**観察日時** 観察は2005年度が10月14日・25日, 11月11日, 12月9日・27日, 1月20日, 2月3日・17日, 3月3日・23日の合計10回である。2006年度が4月7日・28日, 5月19日, 6月2日・16日・30日, 7月14日・28日, 8月11日・25日, 9月8日・22日, 10月6日・27日, 12月15日, 1月12日・26日, 2月23日, 3月12日の合計19回である。2007年度が4月20日, 6月8日・29日, 7月13日の合計4回である。観察時間は朝8:30から昼食開始までの約3時間である。

**観察方法** 参与観察を行い, 幼児に話しかけられれば応じ, 保育者不在で幼児に困難が生じたとき(例えば, 身体攻撃を繰り返し受けるなど)には援助した。DVD撮影とメモ書きにより資料を収集した。

**分析方法** ミホが他児とかかわった場面を抽出して事例を作成し, それを分析し考察した。ミホがかかわった相手, ミホにかかわった幼児, かかわりの方法(行為, 会話, 視線, 表情)と内容, その理由, 保育者援助の内容に注目して分析した。なお観察の後, クラス担当保育者, 園長, 副園長と話し合い, 幼児の家庭状況や注目すべき出来事などの情報を提供してもらい, 分析と考察がより確実にできるように留意した。また幼児名はすべて仮名で記述し, 各保育者は保育者A, 保育者Bなど示し, 個人識別できるようにした。

## 結果と考察

0・1歳クラスと2歳クラスにおける午前中の基本的な日課は8:30から8:45に登園し, 保育室内で自発的な活動を中心として過ごし9:20に片付け, 排泄, おむつを交換する。9:30~9:45におやつを食べ, 9:50から11:30の昼食開始までの時間は, 日によって異なるが, 保育者が提案する活動をしたり, 乳幼児の自発的な活動をしたり, 園行事に参加したり, 散歩に行ったりする。

3歳クラスの午前中の基本的な日課は8:30から8:45に登園し, 遊戯室で4, 5歳クラス児と一緒に自発的活動としての遊びをして過ごし, 9:30に片付けをして排泄する。この時間帯は保育者2人が援助するが, 全ての保育者が順番に担当する。9:40から10:00は保育室で朝の会として保育者が視診し出席を確認したり話をしたりする。10:00から11:30の昼食開始までの時間は, 日によって異なるが, 保育者が提案する活動をしたり, 自発的な活動をしたり, 園外保育に出たりする。

こうした園生活の流れを踏まえ, 各クラスにおけるミホの他児とのかかわりの事例の中から, いくつかの典型的な事例を示して, かかわりの特徴と幼児や保育者の心理を考察する。

### 0・1歳クラスにおけるミホと他児のかかわりと保育者援助

ミホが他児とかかわった事例は45件であった。他児に対する好意の表明や物の譲渡といった親和的なかかわりや, 傍観, 無意図的な関与, 生活行動といった中立的なかかわりは数件とわずかであった。ミホの他児とのかかわりの多くは, 身体攻撃や挑発, 物の奪取といった攻撃的なものであった。0・1歳クラスは0歳クラス該当児と1歳クラス該当児の混合である。ミホより年下の0歳クラス該当児は年下児と最初に記述する。特にその記述がない幼児は1歳クラス該当の同年齢児である。

**身体接触から攻撃的なかかわりへ** ミホは他児と身体が接触しただけでしばしば身体攻撃をしていた。

【事例1-1 11月11日2005年 9:27~9:28 保育室】

ヒロコが乳児用小型滑り台の斜面の下から上へと這って登っている。ミホとサチヨが頂上部から斜面を滑り降りる。そのときミホはヒロコと身体が接触すると, ヒロコの首を両手で押さえる。ヒロコが苦しそうな声を出すと, サチヨがヒロコの髪の毛を引っ張る。ヒロコが「あー」と声をあげるとミホは手を放し, その声に気づいた保育者Gがサチヨの手を払いのける。保育者Gがヒロコを抱きかかえて, 頭を撫でる。

【考察】これは同年齢児に対して行ったものであるが, 年下児に対しても同様に身体攻撃をしていた。ミホがこうした状況で攻撃するのは, 他児の身体接触を自分の行動への妨害や攻撃と感じて怒ったからであろう。またサチヨも攻撃的な行動傾向があり, ミホが攻撃する様子を見て, おもしろくて加わったと推測する。

**物を奪うための攻撃的なかかわり** 冬休み以降になると, ミホの物を奪取するための攻撃的なかかわりはさらに頻度が増え, 激しくなっていた。またなぜ物を奪うのか, そうする理由の不明な場合が多かった。

【事例1-2 2月17日2006年 10:22~10:24 保育室】

アキオがレプリカのフライパンに食材数個を入れていて, ミホは故意にアキオにぶつかり, 食材を飛び散らせる。アキオは「あーだめよ」と叫び食材を拾い始めるとミホがアキオのフライパンを片手で引っ張り奪おうとする。アキオが「あー!」と泣き声で叫ぶが, ミホは表情を変えずにもう一方の手でアキオの手指をフライパンから外す。アキオは「あー嫌だ」と言うが, ミホはフライパンを奪い逃げる。ミホはさらに床にあった同型のフライパンを拾

う。アキオはミホを追い、ミホの持つフライパン1つを握り「返してアキオちゃんの」と言うが、ミホは身体を回転させてアキオの手を外す。

気づいた保育者Cが「ミホちゃん、フライパン2つ持っている。欲張りだよ。1個ずつにしよう」と言うとミホはアキオが握るフライパンの手を放し、さらにもう一つのフライパンも渡そうとする。アキオはそれに気づかずに行ってしまうが、ミホはフライパンを渡そうと差し出す。保育者Cが「じゃあ先生に貸して」と言うと渡す。保育者Cが「ホットケーキを作ろう」と言うとミホは離れ、他児の遊びを歩いて見て回る。

約30秒後、ミホは再びアキオからフライパンを奪おうとし、アキオから抵抗されるものの取り上げる。保育者Aが「これ、アキオちゃんが使っていたの」と言って、直ぐに取り上げアキオに返す。

【事例1-3 3月23日2006年 10:12～10:13 保育室】

ミホがフジオから玩具を力ずくで奪おうとする。保育者Eがミホを制止し、「フジオちゃん2つ持っているから1つ貸してあげて」と言う。フジオはうなずき、ミホに渡す。保育者Eは「ミホちゃん、玩具欲しいときは、貸してっお願いするんだよ」と言うが、ミホは玩具をいじり応じない。保育者Eが「貸して言ってからだよ」と説明し、さらに「ありがとうは？」と促しても応じない。保育者Eがミホの頭に手を添えて「ありがとう」と言いながら、頭を下げさせ、「ありがとうって言うんだよ」と言っても、ミホは応じない。しばらくしてミホはその玩具を床に放置して、他の場所に行ってしまう。

【事例1-4 3月23日2006年 10:23～10:24 保育室】

テツオが保育者Aに「スプーンが欲しい」と言うと、保育者Aが「誰が使っているかな？あーあそこにあった。でも今、使っているよ」と言いながらマオを指差す。その会話を見聞きしたミホはマオに近づくと背中を強く押す。マオが倒れるとテツオがマオのスプーンを握り、さらにマオの顔を手で押さえる。ミホはマオの身体の上に乗って押さえる。それでもマオはスプーンを手放さずに立ち上がる。保育者Aがミホとテツオを制止するが、2人はスプーンを奪おうと激しく身体を動かす。保育者Eが「今、使っているからだめだよ」と言って、ミホとテツオをマオから離れた場所に連れて行く。

【考察】事例1-2でミホは意図的に身体をぶつけて相手の注意をそらしフライパンを奪った。これでミホが物を奪うのは、それを使って遊びたいからではないことが分かる。奪った相手が追ってくることを楽しんでるようである。事例1-3では相手が同じ玩具を2つ持っていたので保育者の仲裁で玩具を手に入れた。相手が玩具を譲ったことに礼を言うように促されても応じなかった様子により、ミホは玩具を受け取るのは当然と考えていたことが分かる。また受け取った玩具を使うこともなく、しばらくすると放置した。なぜ興味もなく、必要もない玩具を欲しがり、反撃されたり叱られたりするリスクを冒してまで奪うのであろうか。また事例1-4ではミホは他児が欲しがったスプーンを奪い取ろうとした。それまでスプーンに全く興味を持っていなかったミホは、なぜ力ずくで奪おうとしたのであろうか。それらは全体考察で検討する。

**意地悪が目的の攻撃的なかかわりと保育者への反抗的な態度** ミホは単に相手に意地悪するための攻撃的なかかわりと推測されるような行動を頻繁にするようになった。それでも2月まではそれを保育者に注意されれば、一応は自分の非を認めたり相手に謝ったりしていた。しかし3月になると保育者の注意を拒否し反抗的態度を示すようになった。こうした反抗的態度をとるのは意地悪のための攻撃的なかかわりの場合がほとんどであった。そうした様子を最初に捉えたのが事例1-5である。また1日に年下児のユウタを断続的に数回攻撃して、保育者が叱っていたが、どれもミホは聞き入れず逃げたのである。

【事例1-5 3月3日2006年 9:36～9:37 保育室】

ミホが年下児のユウタを叩いたので、保育者Eがミホと正対して叱る。しかしミホは顔を背け身体を頻繁に動かして抵抗する。保育者Eは「叩くのは間違い、ばつ。悪いことをしたのだから謝ろう」と話すが、ミホは身体の動きを止めず聞き入れない。保育者Eは他児の援助のためにミホを放して行ってしまう。

【事例1-6 3月23日2006年 9:05～9:06 保育室】

ミホが這っているユウタを片足で踏みつけ動けないようする。保育者Gがミホを制止し叱るが、ミホは顔を左右に振って話を聞かず反省の様子をみせない。保育者Gが「ミホちゃん意地悪したでしょう」と言うとミホは顔を背けて「(意地悪を)したよ」と言う。保育者Gは他児の援助のために他へ行ってしまう。

【事例1-7 3月23日2006年 9:08～9:09 保育室】

ミホがユウタの頬を指で強くつねる。保育者Gがミホの手を押さえて叱り、「ごめんねは」と言う。ミホは頻繁に身体を動かし「放して」と何度も叫ぶ。保育者Gが「分かったの？ごめんねは？」と言うと、ミホは視線を外し聞こうとせず身体をくねらせて逃れようとする。保育者Gは何度も叱り説明する。ミホは保育者Gの手をかわして逃げて行くが、保育者Gは追わない。

【考察】事例1-5ではミホは意図的にアイコンタクトを外し、身体を頻繁に動かし説明を聞き入れない。これ以降、ミホは他児への攻撃的なかかわりを保育者が叱ると反抗して逃げようになった。事例1-6で保育者Gは他児援助のためにミホへの注意を途中で止めて行ってしまった。ここでミホは保育者が叱っても、しばらくすると叱るのを止め自分を放免することを経験した。そこで事例1-7で保育者への反抗を全身で表現してみるとまた放免となった。ミホは保育者の注意はその場限りで短時間であることに気づいたのであろう。保育者の方は注意してもミホが攻撃的なかかわりを繰り返すので言い聞かせても無駄、指導は困難との考えを持ち始めたのであろう。それでミホへの指導が心からの反省を要求するような厳しいものではなくっていったと考える。その結果、ミホにとっては他児に意地悪するのが保育者の注目を引き保育者とかかわれる方法になっていったと推測する。

## 2歳クラスにおけるミホと他児のかかわりと保育者援助

ミホが他児とかかわった事例は118件であった。これまで多かった攻撃的なかかわりが激減し、他児の様子を漠然とみている傍観、注意深くみている観察といった中立的なかかわりが多くなり、好意の表明や物の譲渡といった親和的なかかわりがみられるようになった。

物を手に入れるためのかかわり ミホはこの時期でも他児から物を奪おうとするが、暴力だけで奪うばかりではなく、言葉で意思を表現するようになってきた。

### 【事例2-1 4月28日2006年 9:23~9:29 保育室】

ミホはマオの持つ人形を奪おうとして何度も引っ張る。マオが抵抗してミホの顔を手で押し返すと、ミホはマオの髪の毛を手で引っ張る。気づいた保育者Gがミホを制止する。ミホは保育者Gを見ながらマオの人形を指差し、「あーあー」と泣き声で言う。保育者Gは「これいるの?」と問うと、ミホがうなずく。保育者Gが「使い終わったら借りようね」と言う、マオはうなずくが、ミホは反応しない。しばらくするとマオがミホに人形を渡すと、ミホは無表情で受け取る。保育者Gが「やさしい」と言って、マオの身体をさすり頭を撫でる。その様子をミホは無表情で見る。保育者Gがミホの持つ人形を動かしたり、ミホの顔に近づけたりしながら「よかったね」と言うとミホは笑顔になる。

しばらく後、ミホが床に座り一人で人形を操作していると、マオが寄ってきて別の人形を渡す。ミホは無表情で受け取ると、2つの人形を抱きかかえて立ち上がり歩き回る。しばらくしてマオが絵本を見ていると、ミホが側に来てテーブルに人形を寝かせマオの絵本を横から見ている。2人はまったく会話をしない。

### 【事例2-2 12月15日2006年 8:54~9:10 保育室】

ノドカが「どうぞ」と言い、皿をミホに渡す。するとミホはノドカが手に持つ食材を奪い取る。ノドカが「いやだ」と言うとミホは「貸して」と叫ぶ。ノドカが「返して」と叫ぶがミホは返さない。

しばらくしてミホがリナから食材2つを奪う。リナが「返して」と言うとミホは「貸して、貸して」と叫ぶ。リナが「1つだけ返して」と言うとミホは「貸してって言ったから」と言う。これを数回言い合い、リナが泣き出す。仲裁に来た保育者Bにマオが「ミホちゃんが2つ取ったの。貸したくなかったの」と説明する。保育者Bが「2つあるなら1つ貸してやって」とリナに言うが、リナは泣き続ける。保育者Bが「2つあってもだめなの。じゃあ探しに行こう。なかったら貸してね」とリナに言い、ミホに食材を返させる。

保育者Bとミホが収納箱へ探しに行く。マオとリナ、ノドカは調理をし、皿に盛りつける。そこへサチヨが来て、ミホの調理道具を使って遊ぶ。気づいたミホが戻り取り返そうとすると、サチヨはカップを持って逃げ、ミホが泣き出す。気づいた保育者Bがサチヨを押さえると、サチヨは泣き声をあげ、身体を激しく動かして抵抗する。保育者Bが「貸してって言わなきゃだめなんだよ」と言うと、サチヨは「貸して」と叫ぶ。保育者Bは「でも貸せられないって。だから後でね。取られたら嫌でしょう。はいつて返して」と言うが、サチヨは「嫌だ」と叫ぶ。保育者Bはサチヨからカップを取り上げ、「ミホちゃんが使っていたんでしょう。だから何て言うの」と言うが、サチヨは抵抗する。保育者Bがカップをミホに示しても受け取らないので「いらないの?」と言うと手を出す。保育者Bは「貸してって言わなきゃだめなんだよ。分かったの?何て言うの?」とサチヨに言う。ミホはカップをいじりながら2人のやりとりを見ている。

【考察】事例2-1では人形を力づくで奪おうして仲裁してきた保育者に音声と指差しでマオの持つ物を欲しいことを伝え、保育者を通して相手の譲歩を引き出し、手に入れることに成功した。相手のマオに優しくされて嬉しくてもそれを素直には表現しない。保育者のかかわりで、ようやくうれしさを表現した。優しいマオを気に入る、マオとのかかわりを求めるきっかけとなったようである。

事例2-2ではミホは欲しい物を持つノドカとリナから奪い取るが身体攻撃せずに、貸して欲しいと言葉で意図を伝えた。しかしリナは納得せず、さらに保育者から返還を強要させられた。その直後にミホは使っていたカップをサチ

ヨから奪われ、ノドカとリナの立場を経験した。保育者が叱り、サチヨが抵抗する様子を食い入るように見ていたが、先ほどの自分の行動をそこに見出していたようである。さて物を奪いいざござになったときの保育者の指導の基本は、言葉による会話で貸して欲しいときは「貸して」ということ、言われた方は複数持っているなら貸せること、1個なら「今使っているから後でね」と答えること、というものである。ミホが2つの事例で物を奪い、「貸して」と叫んだのはこの指導で習得した手続きと分かる。

**嫉妬によるかかわり** ミホはマオとサチヨの側にいることが多く、一緒に遊びたい気持ちを持つと分かる。

【事例2-3 9月22日2006年 8:54~9:08 保育室】

マオとサチヨがそれぞれ皿に食材を盛りつけていると、ミホも道具を持って側に座る。ミホが皿に食材を入れてサチヨの前に置くと、サチヨは見もしない。ミホはその皿を持ち上げて自分で食べるふりをする。

マオとサチヨはままごとと道具を持ってテーブルに移動し、そこで2人は一緒に皿に食材を盛りつける。ミホはたぐさんの食材をのせた皿を持って、マオの隣に来てその皿をテーブルに置く。マオがその皿から食材を1つ取るとミホは「ミホの」と言って食材を取り返す。ミホは皿を持って別の場所へ行く。

マオとサチヨは調理のふりをしては皿に盛りつける。その隣にテツオが座る。マオが「いただきます」と言うので3人で食べるふりをする。ミホは離れた所でそれを見ている。マオの皿から食材が1つ落ちるとミホは拾ってマオの皿に入れる。ユウカが「ただいま」と言って3人の側に座る。3人が「お帰りなさい」と言うとユウカも一緒に食べるふりを始める。するとミホがユウカの側に来て「なによ。なによ」と叫びながら顔を近づける。ユウカは直ぐにその場を離れる。それからミホはマオの横に座り、一緒に食べるふりをする。

【考察】マオはミホを受け入れるが、サチヨは拒否することが多い。その状況と理由はこの事例で示したように、ミホは自分が使っているレプリカを、他児が触るとそれを奪われると思い拒否するので、ごっこ遊びとして相手に食事を提供し、食べるふりをするのができず、おもしろくないからであろう。マオはミホのそうした心情を理解して、かかわることができる。しかし、サチヨはミホと同じかそれ以上に自分勝手な面があり、ミホを不愉快な嫌な子どもと思っているようである。ミホもサチヨを勝手な面がある子どもと感じているようであるが、マオと一緒にいるサチヨとは仲良くしたいと思っている。ミホとしてはマオと遊びたいのであるが、自分の専有している物をマオに使用されるのに抵抗があって、なかなかごっこ遊びに参加できないという複雑な心情と推測できる。

そんなときに、ユウカがマオたちの遊びにすんなり参加し楽しそうにしていたのにミホは嫉妬して、ユウカに嫌がらせて追い出したのであろう。ミホにとってはマオは特別な友達になりつつあることが分かる。また、ミホは自分が他児の遊びにうまく参加できないという経験を通して、そうなるのは自分の態度に問題があること、他児から対等な遊び仲間として認められてないことに気づかなければならない。

**他児から攻撃される** ミホは他児からの攻撃に冷静に対応し、暴力で反撃することが少なくなってきた。

【事例2-4 10月27日2006年 9:24~9:28 保育室】

サチヨがミホの持つ人形を奪おうとするので、ミホが強く引っ張り抱きかかえる。するとノドカがミホの腕を数回叩くと、ミホはノドカの頭を一回叩くが直ぐに頭を撫でる。ノドカは「いやー」と叫び、ミホの腕を何度も叩くが、ミホは頭を撫で続ける。それでもノドカが叩き続けるので、ミホはノドカの頭を2回優しくパティングする。ノドカがその腕をさらに数回叩くが、ミホは何もせず叩かれている。気づいた保育者Aが「ノンちゃん」と声をかけると、ノドカがミホの腕を撫でる。ミホは保育者Aとノドカの顔を交互に見て、人形を両腕で抱きかかえる。ノドカはその場を離れる。

【考察】ここではミホはノドカから勘違いで継続的に攻撃されると一度は叩き返したものの、その後は叩かれても反撃せずに我慢していた。それどころか、自分が一度叩いたのを謝罪する意味であろうノドカの頭を撫で続けたのである。これまでのミホからは考えられない行動である。

ノドカがミホを叩いたのは勘違いであるが、これまでのミホの行状から、いざござがあれば悪いのはミホとの判断であろう。それでもミホがノドカを叩き返さなかったのは、ノドカが普段の言動から幼いと分かっていると同時に、他児とのかかわりを大切と気付き、ときには我慢することを身につけたからと考える。

**他児から物を奪われる** ミホは他児から物を奪われても冷静に対応し、暴力で奪い返さなくなってきた。

【事例2-5 3月12日2007年 8:39~8:41 保育室】

ブロックの収納箱から、ミホがブロックピースをいくつか取って繋げていると、サチヨが「ミホちゃん欲張りになっちゃだめだよ」と言う。ミホは黙ってピースを繋げていると、それにサチヨも一緒に繋げる。ある程度の長さになるとサチヨをそれを奪って逃げる。ミホが「ねえーやめて」と言うと、気づいた保育者Hが返すようにサチヨに言う。しかしサチヨは逃げ続ける。ミホは別のブロックピースを繋ぎ始める。

【考察】ミホは持っていたブロックの構成物をサチヨに奪われるが、言葉で制止するだけで、奪い返す行動を取ら

なかった。もしサチヨを追い奪い返しても敵対してしばらく一緒に遊べなくなり、その方がおもしろくないとの判断であろう。サチヨとの関係を大切に、新たにブロックで構成物を作る方を選んだのである。そうしたのブロックで形を構成できる自分の力に自信があり、その後の活動への見通しがあったからでもあると推測する。またサチヨの「欲張りはだめ」との発言はミホを牽制するためである。これは保育者が物の独り占めを戒めとして使っていた言葉であるが、サチヨはこれを根拠にブロックを奪い取ることを正しいことと考え、行動したと推測する。

**他児への興味と観察** ミホは2歳クラス期当初の4月から他児の様子や保育者が他児を叱ったり、なだめたりする様子をしばしば注意深く観察していた。

【事例2-6 5月19日2006年 9:05~9:29 保育室】

ミホは自分で玩具を入れたごっこ遊び用手提げバッグを持って、部屋のあちらこちらを歩き回り、他児の遊びの様子を見て回る。ときには遊ぶ他児の隣に座り、ごく近くで見ている。サチヨは周囲の幼児が玩具や人形を使って遊んでいると、それを奪ってはいざこざを起している。保育者Gが「どうしてサチヨちゃんは人の物ばかり取るんだろう、次から次へと」と呆れたように言うと、サチヨは不機嫌そうに奪った物を返す。ミホはそうした一連の様子に興味深げに見ている。フジオが他児から玩具を奪ったり、他児を一方的に叩いたりして泣かせて、保育者Bに注意させている。ミホは接近して、叱る保育者Bや叱られるフジオ、泣いている幼児の表情を見ている。ミホは他児に話しかけず、一緒に行動をせず、黙って観察を続けている。

【考察】ミホのこのような観察は断続的であるが自発活動時間の2割前後を占めていた。それほど他児の行動や心情に対する興味が強かったといえる。ミホはサチヨやフジオが他児から物を奪ってはいざこざを起し叱られたりする様子に、これまでの自分を重ね合わせて見ていたのかもしれない。また攻撃され泣かされた幼児を真剣な表情で見ている様子から、その幼児に深く同情していることが分かった。さらに何度も繰り返し注意している保育者の困った表情、怒った表情を見て、いろいろ感じていたのであろう。この観察を通してミホは奪う側の幼児、奪われる側の幼児、そして保育者の心情を理解するようになり、自分と他児とのかかわりを意識的に修正するようになったと推測する。ミホのこの熱心な観察は翌年の3月まで続いた。

**他児と微笑み合う** ミホは他児と視線を交わしTV映像をほほえみ合いながら嬉しそうにみている。

【事例2-7 6月2日2006年 11:09~11:10 保育室】

マオがテレビ画面を指差して笑顔を見せる。それを見たミホは同じように指差して笑い、エミに画面を注目するようにし向ける。エミは画面を見てから、ミホに微笑み返す。マオとミホ、エミはしばらく視聴する。映像の登場人物が「バイバイ」と言う。それを真似てマオが「バイバイ」と言うと、ミホは笑顔で「バイバイだって」と言う。

【考察】ミホはマオが映像を指差して笑顔を向けたのを、自分を仲間とみていると感じて嬉しかったのであろう。その嬉しさを他児に表現したく、自分からもエミに働きかけたようである。それに対してエミもミホに笑顔で応じたので、ミホは好意を持って受け入れられたと感じたようである。これがミホに他児と優しくかかわることの嬉しさ、気持ちよさを印象づけたと推測する。さらにマオを自分を受け入れ優しくしてくれる特別な幼児、友達との思いを強くしたであろう。

**他児を気にかける** ミホはマオとの関係を通してリナとも遊ぶようになるなど仲間関係を広げている。

【事例2-8 3月12日2007年 8:35~8:36 保育室】

ミホは身支度をしながら、「まだリナちゃん来てないや。なにやっているんだろうリナちゃん」とサチヨに話す。サチヨは応じない。ミホはマオの側に寄ると、マオと手をつないで部屋のあちらこちらを歩く。

【考察】ミホが登園してこないリナを心配し、サチヨに話しかけた。それにサチヨが反応しないのは、ミホをあまり好きではないし、さらにリナのことを気にもしていないからであろう。ミホは自分を受容してくれるマオと一緒に行動して、さらにマオは友達との意識を強くしていたのであろう。

**他児と一緒にごっこ遊び遊びをし役割を宣言する** ミホがごっこ遊びで自分の役名を宣言して行動し始める。

【事例2-9 1月12日2007年 8:51~8:52 保育室】

マオがテーブルに皿5枚を並べ、それぞれにレプリカのケーキを載せる。ミホはままと道具収納箱から食器、鍋、食材、包丁などを持ってきてマオの隣に置く。ミホが「こっちにあるよ。今日は、おかあしゃんなの」とマオに言って、まな板の上で野菜を切るふりをし、食材をフライパンに入れ忙しそうに料理をするふりをする。食材を皿に盛りつけると「はい」と言って、マオに渡す。

【考察】これはミホが自分の役割を宣言して行動した場面を初めて捉えたものである。マオが一人でごっこ遊びをしていると、他児が側に寄ってきて一緒に遊ぶことが多い。マオはレプリカやその他の物を組み合わせて遊びを進めることができるほど、物の扱いを知り、遊びのアイデアが豊富だからである。さらにマオは性格が温和でやさしい

からでもある。ミホは単に物を扱って遊ぶだけではなく、それを扱う人の役名を意識してふりをするようになったのである。ミホはマオと一緒に遊ぶことで他児とのかかわり方を習得するばかりではなく、自分がふりしている人の社会的な役割を意識し、それにふさわしい行動をして遊びを進めるやり方も学んできたのであろう。

### 3歳クラスにおけるミホと他児のかかわりと保育者援助

ミホが他児とかかわった事例は12件であった。好意の表明や物の譲渡といった親和的なかかわりが多くなっていた。また他児と保育者の様子を観察するかかわりが2歳クラス期と同様にみられた。特定の幼児とのかかわりを求め、それを行動ばかりではなく言葉でも示すようになった。

**他児に気を遣う** ミホは同じテーブルに着席する生活グループの幼児とも良好にかかわっていた。ときには自分の考えを主張し過ぎて、相手を怒らせたが、そのアフターケアをするようにもなった。

#### 【事例3-1 4月20日2007年 11:30 保育室】

昼食準備の時刻となり、幼児たちは着席し始める。ミホが箸を出し、ツトムがフォークを出す。ミホは「フォークなんていらんよ」とツトムに言う。ツトムは不機嫌そうに「いいんだよ」と言う。ミホはツトムの表情を見て、「ツトムくん、スパゲッティのときはフォークはいいの」と言う。ツトムは返事をしない。

**【考察】**この事例でミホは給食準備でフォークを出したツトムに、それは低年齢児の使うもので3歳クラス児なら箸を使うべきであるという意味を込めて発言した。そしてツトムの表情と言い方から非常に気分を悪くしたと察して、ミホは言い直し説明したのである。これまでミホは自分の言動に対して相手の表情などから感情を読み取って言い直したことはなかった。このかかわりは相手の心情を尊重し、良好な関係を持ちたいとのミホの心の育ちを示すものであろう。

**仲間を求め一緒に行動する** ミホはマオとサチヨを求め、一緒に遊びたがる。しかしサチヨは意識的にミホを避け、かかわりを拒否していたが、ミホはそれでもサチヨと関係を持つようとしていた。

#### 【事例3-2 6月29日2007年 8:55~9:01 遊戯室】

ミホは汽車型の大型遊具（今後、汽車と記述する）の上に登り、そこからマオとサチヨを見つけると走っていく。それに気づいたサチヨはマオと手を繋ぎ走って逃げるのでミホが追う。ミホが追いつきサチヨにタッチすると、サチヨが「だめだよ」と言いながら、片手でミホの胸を押す。2人がまた走りだすと、ミホが追う。汽車の所でミホが逆方向から追うと2人は歓声をあげて笑顔で逃げる。ミホも笑顔で追い、サチヨにタッチする。するとサチヨは真剣な表情になり、ミホの手を払い除ける。マオがミホに手を差し伸べて手を繋ぎ、3人で遊戯室を走り回る。ミホがサチヨに寄って手を握ろうとするが、サチヨは拒否するので、マオと手を繋ぐ。3人はときどき座っては、また走り回る。これを何度か繰り返していた。

**【考察】**ミホはサチヨとのかかわりを求め、一緒に遊ぼうとしている。しかしサチヨはミホからの働きかけを拒否したり、攻撃的なかかわりではねつけたりした。それでもミホは不服を言わずに、行動によるかかわりを求めている。マオがミホの心情に同情して、自分の側で一緒に遊べるようにしてくれたので、ミホは嫌な思いをせずに済んでいた。マオの思いやりに救われているミホである。

**拒否されてもかかわろうとする** ミホはかかわりを拒否するサチヨに言葉と物を媒介してかかわりを求める。

#### 【事例3-3 7月13日2007年 9:01~9:05 遊戯室】

ミホはステージ上で絵本を読んでいると近くをサチヨが通るので「サチヨちゃん」と数回呼ぶ。サチヨはミホを見ようもしない。さらにミホは「サチヨちゃん、ちょっと来てよ」と2回呼ぶが、サチヨは応じない。サチヨが鉄棒を始めたので、ミホはそこへ行き「サチヨちゃん」と言い、絵本を渡そうとするが、サチヨはまったく応じない。サチヨは何も言わずに他へ行ってしまう。

マオが鉄棒へ来て前転をすると、ミホも鉄棒を握る。ミホは鉄棒に身体をのせるのがやっつである。それでも前回りをしようと何度も試みる。するとマオがミホの身体を手で支え前回りするように手伝う。

**【考察】**ミホは自分とのかかわりをサチヨが避けるので、名前を何度も呼び、側に来てくれるように懇願していた。それでもサチヨは応じないが、ミホは弱気にならずにさらに絵本を渡してかかわろうと試みた。ミホの働きかけに対してサチヨは拒否する際に、迷惑そうな不機嫌な表情と態度を示しているが、ミホはサチヨの心情に気づいていないようである。そうなったときに、たいていマオと直ぐに別の活動をして、サチヨのことを忘れてしまえるので、その心情を深く考えることもないからであろう。またマオであっても、サチヨの態度からその心情を察してミホに言葉で説明するのは困難と思われる。それができるのは保育者であろう。ミホがサチヨの複雑な心情を分かるには、共感的に理解できるような説明が必要と考える。

## 全体的考察

### ミホの各期における他児とのかかわりの特徴と保育者援助

**1歳クラス期** この時期におけるかかわりの特徴として、高い攻撃性、理由不明な攻撃的かかわり、反省する気持ちのなさがあげられる。

まず高い攻撃性であるが、ミホは他児の軽い身体接触でさえ相手に身体攻撃していた。相手に突然怒り、見境がなくなっていたことから、ミホはいわゆるキレやすい性格、カットとなる性格と分かる。

ミホは年下児に攻撃的にかかわり、意地悪をしていた。それを見て、保育者が制止し叱ると、アイコンタクトを外し身体を頻りに動かし聞き入れなかった。それを自分が悪いとは認めず反省しないことの意味表示と解釈した。そうした行動に対して保育者が「ミホは何度言ってもやめない、分かっていない子ども」と容認する態度を取ったので、それをより助長したとも考えられる。それにしても、ミホは何のために年下児をいじめたのであろうか。さらに保育者の叱るなどの働きかけに反抗的態度をとり、拒否したのはなぜなのであろうか。

またミホは他児から物を奪うために攻撃的にかかわりを頻りにしていたが、その奪った物で遊ぶことはほとんどなかった。ミホは何のために奪うのであろうか。遊びもしない物を相手から反撃されたり保育者に叱られたりするリスクを冒してまでなぜ奪うのか、その理由は不明である。ここでの疑問は次項の2歳クラス期の実態を踏まえて、次の節で検討する。

**2歳クラス期** この時期におけるかかわりの特徴として、他児の観察、仲間との遊び、攻撃性の低下、中立的・好意的かかわりの増加、他児への同情、言葉によるかかわりがあげられる。

ミホは4月当初から、ままごとや道具や人形を使って、一人遊びを多くしていた。一人で遊びを進めながら、周囲にいる他児や保育者の様子を観察していた。ミホが一人遊びをしていると、他児が側に来て、同じような活動を始め一緒に遊ぶようにもなった。他児と一緒に遊ぶ経験を重ねていくうちに次第にミホの方からマオやサチヨ、リナとのかかわりを求めるようになった。マオなどの特定の仲間と一緒に遊ぶことで、ミホは自分を「おかあさん」という役名で命名して調理のふりをするなど、遊びで表現する内容が詳細になり、イメージがより具体的になっていた。またユウカがマオの遊びに参加するのをミホは追い出した。これはマオと仲良くしようとする他児への嫉妬と解釈した。それほどにマオを大事な友達と意識していたと思われる。しかしそうであってもミホはしばしば一人になって穏やかに遊びを進めながら他児をよく観察していた。

1歳クラス期ではミホの一人遊びを観察したことはなかったし、保育者が手遊びなどをリードして行ってもミホはそれをしなかった。2歳クラス期でも保育者のする手遊びを、ミホは見ているだけで一緒にしなかった。しかしミホは一人で、手遊びを楽しそうにやっていた。例えば7月14日に、ミホが一人で絵本「ぞうさんのオムライス」を開くと、「3匹のこぶた」という。頁をめくるときに「今日は3匹のこぶたです」と言う。この言葉を頁をめくるときに笑顔で言う。頁が終わると、その絵本を尻の下に敷き、「始まるよったら始まるよ、ごーとごーで手はおひぎ」と笑顔で言いながら手指を動かす。それを終えるとリズムカルに拍手したのであった。ミホは手遊びができないのではなく、しなかっただけなのである。なぜ一人ではやって、保育者のリードではしないのであろうか。これも次の節で検討しよう。

ミホは他児から物を奪われたり、叩かれたりすると怒って1度は暴力で反撃したものの、直ぐに冷静になりやめていた。それで相手が叩き続けても我慢していたし、自発的に相手を撫でるなどして反省を示していた。また身体攻撃を受け泣いている幼児を保育者がなだめているとミホは間近に寄り、傷跡や表情を心配そうに見ていた。言葉をかけたり、手で撫でたりなどはしないものの同情していたことが分かった。このような幼児と保育者の様子を見て、ミホは身体攻撃など攻撃的にかかわりを思い止まるようにもなっていたと推測する。他児とのかかわりを通してミホの社会性と自己意識は確実に育ってきたといえよう。

さて幼児たちは「貸して」と言えば、他児が使っている物を借りられると思っていた。特に複数の同じ玩具を持つ幼児に「貸して」と頼んだのに、貸さないのは欲張りで悪いことと考えていた。これは幼児たちの物の取り合いの場面における保育者の指導によるものであった。そう指導したのは、相手の持つ物を欲しいからといって黙って力づくで奪うのではなく、相手に「貸して欲しい」と言葉で頼み、頼まれた方には「使っているから後で」とか「いいよ」と言葉で答える方法を伝えるためであろう。頼まれた幼児が物を2つ以上を持っていた場合、保育者は頼む側に立ち、貸すように説得することが多かった。それは興味を引く玩具を手当たりしだいに持つ幼児がいるからである。そうした場面に立ち会った幼児は状況に関係なく保育者の行動を適切なやり方と理解するであろう。しかし相手の心情と状況により、適切なやり方が異なることを知り、そう行動しなければならない。それは様々な場面での保育者のやり方を見て学ぶしかない。それゆえ保育者はときには時間をかけて、その状況とお互いの心情の理解を促すように言

葉で説明をする必要があろう。

3歳クラス期 この時期の7月までのかかわりの特徴は他児への気遣い、遊び仲間を求める、である。

ミホは言葉での説明がある程度できるので、クラスの同じ生活グループの幼児とも会話し良好なかかわりをするようになった。自分の言葉で相手に嫌な思いをさせたと表情から推測して、言葉でアフターケアしてなだめていた。他児の気持ちを敏感に感じ取り、それに対応することが可能になっている。

ミホはマオとサチヨとのかかわりを意識的に求め、一緒に遊びたいと望んでいた。そのミホをマオは受け入れるものの、サチヨは拒否していた。それにも挫けずにミホはサチヨに言葉をかけたり、絵本を渡そうとしたりして関係を持つと努力していた。その働きかけをサチヨはすべて無視する形で拒絶した。サチヨはミホに反発し、嫌っているようであった。観察で知る限りでは、ミホはサチヨに嫌がられるようなことをしてはいなかった。そうであるならば、サチヨはミホ以上に自分勝手な面が多々見られることから、サチヨがミホを拒否する理由を次のように考える。サチヨにとって、ミホは自分の欲しがる物を持っていても譲ってくれないし、自分がそれを奪おうとすれば抗議するなどサチヨの自分勝手な行動を認めず、不服を言う。一方、マオはサチヨのそうした面を受け入れて一緒に遊んでくれる。サチヨにとってミホはマオに比べ嫌な幼児であり、それで嫌うと推測する。ミホがこの状態を乗り越えていくには、サチヨの心情を理解できるように説明してくれる保育者の援助が必要なのである。

## 総括

2歳クラス期と3歳クラス期を通して、ミホは幼児と保育者の様子をよく観察していた。それは他児が何をどのようにして遊んでいるかに興味があったからであろう。さらに保育者が他児のいざこざを仲裁する場面では他児に同情し、さらに保育者の説明をよく聞き、どうすべきかを学んでいたようである。また保育者が手遊びや遊戯をリードする場面では一緒にしなくても記憶していた。だから一人遊びとして手遊びをし、保育者の口調で絵本の頁をめくることができた。その一方、ミホはお片付けのときになると、他児が出した玩具等も片付けようとしていたが、その様子から保育者に認めて欲しいという気持ちが見え隠れしていた。保育者の評価、それが反映する他児からの評価を気にしていたのであろう。こうした状況を考慮して、ミホが保育者と一緒に手遊びをしないのは、周囲に上手と認められる自信がないからと推測した。

1歳クラス期ではミホは一人遊びをしなかったし、保育者の援助がないと他児とも遊ばなかった。ミホは周囲の幼児から物を奪い、身体を叩く、つねるなどの攻撃的にかかわりをしていた。2歳クラス期になると一転してミホの他児への攻撃的にかかわりは激減した。ミホは一人遊びや他児と平行遊びをするようになり、さらに他児とかわって遊ぶようになった。従って1歳クラス期ではミホはしたい遊びを見つけられず、退屈な時間を埋めるために必要でもない物を他児から奪ったり、他児に意地悪したりしていたと推測する。すなわちミホの攻撃的なかかわりとそれを保育者が叱ったり、注意したりすることは、ミホにはやることのない空白の時間を埋めるものであったのであろう。それで保育者の働きかけを拒否する態度を取り、さらに保育者のかかわりを引き出そうとしたと推測する。それは楽しくない生活への苛立ちを表現したものとも考えられる。そうであったならば、ミホの攻撃的なかかわりを減少させるには、それを叱るのではなく、保育者が遊びを提案し、遊びをリードしてクラスの幼児が遊べるような指導が必要であったのであろう。それではなぜ保育者は幼児に遊びを提案しなかったのであろうか。0・1歳クラスでは規則通りの保育者の人員配置をしても多忙であり、人手不足と感じていたと思われる。そこで、保育者はまず安全に健康に生活するために乳幼児の養護と生活行動の援助に向かい、彼らの遊びへの援助は後回しにしていたと推測する。

## 引用文献

千羽喜代子 2000 0・1・2歳児保育：実践と研究，保育学研究，30，1，88-97.

荻野美佐子 1986 低年齢児集団保育における子ども間関係の形成，無藤隆・内田伸子・齊藤こずゑ（編著）子ども時代を豊かに：新しい保育心理学（pp.18-58）学文社

齊藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ 1986 仲間関係，無藤隆・内田伸子・齊藤こずゑ（編著）子ども時代を豊かに：新しい保育心理学（pp.59-111）学文社

## 付記

研究にご協力をいただきました保育園の先生方、園児のみなさんに心より感謝いたします。なお本研究は平成17・18年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(2)課題番号17530470の援助を受けてなされた研究の一部である。

# Infant Peer Relationships and Support from Nurses at Nursery School: A Case Study of “Miho”, a Female Infant

Ryohei MARUYAMA\*

## ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify the features of Miho's relationships and the support provided by children's nurses in a nursery school. Miho was an assumed name.

Our participants were Miho, children who were associated with Miho and several children's nurses in a nursery school in Niigata City. We observed Miho's interaction with children and nurses' activities through participative observation approximately twice every month for twenty-two months from October 2005 to July 2007, and observed them thirty-three times in total.

We analyzed cases from those observations and concluded that in the one-year-old class Miho displayed a considerable number of aggressive actions to deprive her peers of things such as toys, but in the two-year-old class Miho's aggressive actions had decreased considerably. As we analyzed the content of Miho's play and her interaction with children, we considered why Miho had aggressive actions and support of children's nurses.

---

\* Division of Early Childhood Education